

油彩のきらめき —ヨーロッパの風景—

三岸節子は二度の渡欧を経て、風景画家として確固たる地位を築きました。節子が辿り着いた独自の乾いた色彩に輝く風景画と、そこに到達するまでの苦難の道程を紹介します。

■油彩への執着

1905(明治38)年、裕福な大地主の家庭に生まれた節子。先天性の股関節脱臼を患い、10人兄妹の中でも際立って母親から疎んじられて育ちました。15歳のとき実家が経営する織物工場が倒産すると、節子は洋画家を目指すことを家族に告げます。しかしながら女性洋画家の存在が皆無に等しい時代、当然のように猛反対に遭いました。母方が医師の家系だったことから母は医学の道に進むことを求め、代々書画の蒐集をしていたことから父は日本画家ならばと譲歩しますが、節子はハンガーストライキを決行してまでも油彩に執着し、ついに単身上京し洋画を学ぶこととなりました。女性洋画家の先駆者・三岸節子の誕生の舞台裏には、家庭環境への反逆、家系の呪縛からの解放といった意味合いが色濃くありました。

■あこがれのヨーロッパへ

美術学校に在学中、札幌から上京した三岸好太郎(1903-1934)と出会い、卒業後ほどなくして2人は結婚します。しかしながら好太郎は31歳の若さで急逝、結婚生活はわずか10年で終焉を迎えました。誰よりも強くフランスへの憧れを抱いていた好太郎は、敏感にヨーロッパ美術界の動向を察知し、短い人生の中で目まぐるしく作風を転換させました。最後に行き着いたモチーフは、貝殻、そして自身が叶うことのなかった渡欧の夢を託したかのような、海洋を渡る蝶でした。



三岸好太郎 《蝶》

好太郎との死別から20年後の1954(昭和29)年、49歳となった節子は、自身の、そして好太郎の念願だったフランスへ初めて渡り、感極まって涙しました。翌年帰国した節子に、当時新聞記者だった作家・司馬遼太郎が面会し、1981(昭和56)年に以下のように回想しています。

「帰りの船が沖縄に近づいたとき、ああまたあの水蒸気の国に帰るのか、と思いました」と、彼女がいったとき、このひとの色彩がみごとに乾いて発色していることを思いあわせ、さまざまなことを連想した。(中略)この地(※南仏)の乾いた空気と、色彩のあざやかさは、彼女の中にあふれてしばしば出所をうしなっていた造形に自由をあたえた。(注1)

若い頃からカラリストと称され、研ぎ澄まされた色彩感覚を持つ節子は、水蒸気の膜で覆われた高湿度な日本を離れ、透明度の高いヨーロッパの地を訪れたことにより、油彩画家としてさらなる高みに到達しました。1968(昭和43)年には二度目の渡仏を果たし、20年余りの滞在のうちに風景画家として国内外での評価を確立しました。司馬が指摘するように、節子の油彩は独特の乾いた画面を見せています。ときには絵具に砂を混ぜざらついた絵肌を作り上げるなど、油彩の持つ光沢をあえて抑制することにより、独自のきらめきを放っています。

【特集展示】三岸節子と肖像画

裸婦を描くにしてもコスチュームを描くにしても、対象が生き物だといふことがまだ気がかりです。静物のやうに静かに黙つてゐてくれない。生きた動物は困るのです。まして相手に気兼ね、気苦労をするやうではなほさら厩。(注2)

エッセイの中でこのように語る節子は、その言葉の通り人物を描くことはほとんどありませんでした。そんな節子の貴重な肖像画が、2017年から2020年にかけて相次いで当館に収蔵されました。

《長坂金作氏像》※2019年寄託作品(初公開)

愛知県東浦町で1915(大正4)年頃から開業医を務めていた長坂氏。節子の母方が医師であったことから交流があり、まだ画家として売れる前の作品を購入するなど、若き日の節子を数年にわたり援助していたようです。節子が30歳前後の頃と推定される本作品には、まだ稚拙味が感じられます。正装ではなく日常使いのスーツ、やや曲がったネクタイも、そのような印象を与える一因でしょうか。現存する節子作品の中では最初期の肖像画であり、大変貴重な資料です。

『週刊朝日』表紙コンクール原画

1951(昭和26)年～1958(昭和33)年にわたり実施された『週刊朝日』表紙コンクール。毎年名だたる画家陣が15週にわたって週替わりで表紙を飾り、原画が読者プレゼントされていました。節子は女性作家として唯一の参加となった第1回を皮切りに、小磯良平、東郷青児らとともに最多の5回、表紙を飾っています。

当館は2017年に第7回表紙コンクール作品《貝谷八百子氏肖像画》、2018年には第8回作品《浜村美智子氏肖像画》を、当選者やその遺族から寄贈を受けました。第6回作品《谷桃子氏肖像画》は所在不明ですが、その習作にあたるデッサン画が見つかり、2019年に所有者から寄託を受けました。

《小林和作肖像(尾道にて)》※2020年新収蔵作品(初公開)

広島県尾道市の洋画家・小林和作(1888-1974)。これまであまり知られていませんでしたが、戦前から戦後にかけて節子と深い交流があったことがわかってきました。ともに1920年代初に上京していますが、和作は1934(昭和9)年に尾道に移り、86歳で亡くなるまでそこに住み続けています。その和作のもとを、少なくとも節子は1942(昭和17)年以前からしばしば訪ね、その作品を高く評価していたようです。ともに裕福な家庭に生まれながら生来のハンディキャップ(節子は股関節脱臼、和作は重度の吃音症)を背負い、没落の辛苦も味わった両者。配偶者の死別の時期も重なっており、それらの逆境を乗り越えようとする互いの姿に強い共感と尊敬を抱き、心が通じ合ったのかもかもしれません。

(注1) 司馬遼太郎『微光のなかの宇宙—私の美術観—』1988年、中央公論社、181-183頁

(注2) 三岸節子『花より花らしく』1977年、求龍堂、16-17頁